

論文 / 著書情報  
Article / Book Information

題目(和文)	
Title(English)	Applicability, Changeability and Inhabitability in the Concept of Capsule Architecture
著者(和文)	DereznichenkoVolodymyr
Author(English)	Volodymyr Dereznichenko
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第12252号, 授与年月日:2022年9月22日, 学位の種別:課程博士, 審査員:塩崎 太伸,安田 幸一,奥山 信一,塚本 由晴,山崎 鯛介
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第12252号, Conferred date:2022/9/22, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

(博士課程)

## 論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第	号	学位申請者氏名		Dereznichenko Volodymyr	
		氏名	職名		氏名	職名
論文審査 審査員	主査	塩崎太伸	准教授	審査員	山崎鯛介	教授
	審査員	安田幸一	教授			
		奥山信一	教授			
		塚本由晴	教授			

### 論文審査の要旨 (2000 字程度)

本論文は「Applicability, Changeability and Inhabitability in the Concept of Capsule Architecture (カプセル建築の設計主題における適用性、変化性、居住性)」と題し、以下の6章により構成されている。

第1章「Introduction (序論)」では、既往研究、研究の範囲と方法、資料について述べ、本論文の位置づけと意義を明確にしている。具体的には、まず既往研究に基づいて本論におけるカプセル建築を定義した上で、世界各国で設計されてきたカプセル建築の特徴を「Applicability (適用性)」、「Changeability (変化性)」、「Inhabitability (居住性)」の3つで検討することの意義を位置づけ、「Applicability」についてはカプセル建築の設計主題・実体的特徴を、「Changeability」については変化に関する意図とリノベーション手法を、「Inhabitability」についてはカプセル建築内部の運用実態をそれぞれ明らかにし、さらにそれらを相互に比較検討することで、カプセル建築の設計主題における適用性、変化性、居住性の特徴を総体的かつ相対的に位置づけることが本論の目的であることを述べている。

第2章「Concept and Physical Characteristics of Capsule Architecture (カプセル建築における設計主題と実体的特徴)」では、カプセル建築の適用性として、設計時の建築家による主題と実体的な特徴を検討している。その結果、カプセル建築の最初期の事例と考えられるモダニズム期の1930年から現在に至るおよそ1世紀弱の期間において265の事例(プロジェクトを含む)を蒐集し、それらが1960年代前後と2010年代前後の2つのピークに集中して設計されていること、カプセル建築の設計主題が「可動的性格(カプセルが動かせることに重点を置く主題)」、「拡張的性格(カプセルを増減できることに重点を置く主題)」、「心理的性格(閉じたカプセルの内部での経験やそれに関する感覚、新しい精神性に重点を置く主題)」の3つとその組み合わせで把握できることを述べ、さらにそれらとカプセルの形状、機能、素材、サイズ、個数、構造との関係を整理・検討し教法的傾向を通時的に明らかにしている。

第3章「Aspect of Changeability of Capsule Architecture and Actual Renovation (カプセル建築の変化とリノベーションの実態)」では、カプセル建築の変化性として、可動的性格、拡張的性格を元にした変化に関する意図を位置づけるとともにリノベーションの実態を調査・検討している。その結果、カプセル建築の変化についての意図はそのカプセル部について、「交換/除去」、「追加/構造の拡張」、「再配置」、「接合/融合」、「可動性/移動性」、「機能変更」、「リサイクル性/再利用」、「製造施設」の8つで把握することができ、リノベーションの実態が、それらの意図の実現、一部の実現、新たな手法(「保存」、「維持」、「場所の変更」、「構造的改修」、「ファサードと外観の修理」、「内装のリノベーション」、「機能の更新/機能の適合」)の導入の組み合わせで実践されていることを明らかにしている。

第4章「Social Aspect of Capsule Architecture, its Residents and Communities (カプセル建築の社会的側面、住人とコミュニティ)」では、カプセル建築の居住性として、心理的性格を元にした内部空間の社会的・機能的実態を、利用目的等種別、家具等の配置の有無、利用者コミュニティ活動の有無から検討している。その結果、利用目的等種別については「長期滞在/一時的滞在」、「個人利用/複数名利用」から、家具等の配置は「洗濯機」、「ソファ」などの有無から、利用者コミュニティ活動については「交流ウェブサイトの有無」、「運営会社との連携の有無」から整理しその実態を明らかにしている。

第5章「Theory and Practice of Capsule Architecture (カプセル建築の理論と実践)」では、第2章から第4章で明らかにした内容を相互に比較・検討している。その結果、カプセル建築の定義、カプセル建築の設計主題と実体的特徴、カプセル建築の変化に関する意図とリノベーションの実態、カプセル建築の運用実態についての相互の関連性から、カプセル建築の理論と実践について、「Container capsule」、「Parasitic capsule」、「Interior capsule」、「Pop-up capsule」の4つの方向性を示している。

第6章「Conclusion (結論)」では、以上の各章で得られた結果をまとめ、本論で得られた知見を総括している。これを要するに、本論文は主に1960年代前後と2010年代前後に集中的に世界中で設計されたカプセル建築について、265の事例の設計時と運用時の特徴を元に、それらの適用性、変化性、居住性を明らかにしたものであり、カプセル建築の理論と実践についての4つの方向性を示した本論文の知見は、現代の建築設計・建築意匠論分野における理論面・実践面の双方において貴重な視点を提供した論文といえる。これより建築学上貢献するところが大きいことから、博士(学術)の学位論文として十分に価値があるものと認める。

注意:「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチポータル(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。